聞く時	質問する。	聞く。自分の考えと同じ点とちがう点をはっきりさせる。	生かせる部分をさがしながら聞く。
4．問題を解く時	⑩なまけないでやる。わからなくともへこたれない。わからないときは先生に相談する。 ⑪終わったら見直しもう一度やってみる。	⑩ → ⑪終わったら検討し，時間をむだにしない。	⑩ → ⑪ → ⑫答えのあるべき範囲を考え検討する。1つの解法に満足せず必ず別解を開発する。
5．ノートする時	⑬指図をよく聞いて正しく書く。	⑬ → ⑭速く書くようにつとめる。 ⑮ノートの形式をそれに従う。	⑬ → ⑭ → ⑮ → ⑯ノートしたことがあとでわかるように書く。 ⑰わかったことや感想もつづる。

〈学習の進め方についてのおおよその到達目標〉

1，2年――学習の進め方を意識し，時には段階の名称や段階の名称に対応することば（予想・確かめなど）を使うことができる。

3，4年――段階の名称・順序を覚え，次なる学習活動を予測することができる。

5，6年――5段階の一部または全部を主体的に進めることができ，その経過を段階名を活用して要領よくノートすることができる。

4．教師の役割

通常わたしたちが考える「教材研究」は目標設定ならぬ目標理解に始まり教材理解で終わるようである。授業を組み立てる教師は，授業の要素である目標・教材・児童・そして授業者である自分とそれらのかかわりに精通していなければならない。そうして，相互のかかわりを勘案して，必要があればある要素に規制を加えつつ，それらを有効に組み立てるのが教師に課せられた最大の課題であると考えた。

授業風景

5.基礎的な知識と技能を身につけさせる授業過程

本校が設定した児童主体の授業過程は「つかむ―しらべる―みつける―まとめる―ひろげる」の5段階であるが，真の児童主体の学習活動は，目標・教材・児童・教師とそのかかわりで保障されなければならないと考えて，下表のような授業組立ての手引きを作成し，その実践化を図った。

また，授業の組立ての状況を形象化するために授業案へフローチャートを導入した。授業において目標行動を期待するには，下位目標行動が着々と具現されなければならない。したがって，下位目標行動は授業の区切り区切りのねらいとなり，評価とフィードバックが必要となる。そうした授業の組立てを表現するのにフローチャートが適していると考えたからである。

〈授業組立ての手引き〉　基本的な授業過程の各段階における，目標・教材・児童・教師のあり方とそのかかわり

段階名と段階の目標	教　　材	児　　童	教　　師
1　つかむ 小単元または単位時間の目標に迫る課題を主体的にとらえさせる段階 課題は教師が設定して与えるものではなく，児童が新しい事象に出会ってするどく反応し，疑問や矛盾，興味や必要感を抱いて設定するようにさせたい。その	児童との出会いにおいて，児童に疑問や矛盾，興味や解決への必要感を抱かせ，児童の達成動機を触発する適度な抵抗をもち，しかも，児童の抱く知的好奇心が，小単元や単位時間の目標またはその周辺を対象とするものもなければならない。	新しい事象（教材）との出会いを楽しみに待ち，提示された教材にするどく反応し，これまでとらえていた自分の数理の不十分さや矛盾を感じ「へんだな」「どうすればよいかな」といった問題意識から「何とか解決できそうだ，よしみんなでやってみよう」という共通の課題に，自らねり上げていく。 新しい事象との出会いを楽しみに待つということは，結局算数が	左記の教材を準備し，できるだけ児童主体の課題把握がなされるよう努めて制御を少なくしながら，問題意識をゆさぶり，掘り起こし，課題に高めていく。そのためには教材提示に工夫をこらし，特に低学年では教師の演出を加えたりする。